

「やり直すことのできる福音の恵み」  
マルコの福音書 1：1-8

平吹光太

## I 時代背景、書かれた目的：

福音書はマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネの4つ。その中で一番短く、一番先に書かれたのはマルコの福音書。それぞれの福音書の著者達は、それぞれの読者の必要に答えるために、福音書を書き、マルコは、ユダヤ人よりもローマ人を中心とする異邦人に向けて、この福音書を書いた。著者はマルコ、執筆年代は、紀元 50 年代。この頃は、教会、キリスト者への激しい迫害の時代。つまり、マルコの福音書は、福音を伝えるためであるとともに、信仰を持ってまだ間もない異邦人クリスチャンを励まし、キリスト者として生きることを教えるために書かれたのがマルコの福音書。

## II マルコの意図的書き方

## 1. 「神の子、イエス・キリストの福音のはじめ。」：1

四福音書の中で、マルコだけにイエス・キリストの誕生物語の記述がない。マルコは福音書の一番初めに、「福音のはじめ」と書き出す。福音とは、良き知らせという意味。

この「はじめ」という言葉はアルケーというギリシャ語が使われており、「はじめ」とか「原点」という意味。これは創世記 1 章 1 節の冒頭にあります「はじめに」と同じ言葉が使われている。マルコが偶然にこれを使ったのではなく、意図的にこれを使っている。つまり、創世記の「はじめに」は、無から有を生み出すという驚くべき天地創造の御業をされたが、マルコの「はじめ」は、神に背き、その罪によって滅びるはずの私たち人間を、同じく神のみことばによって義と救いの御業が成されるのだということをマルコは語り始める。いよいよ、救いの完成の幕開けが成されて行くのだと語り始める。

## 2. 荒野のバプテスマのヨハネ：2～8

なぜ、ここで、バプテスマのヨハネをマルコは記しているのか？

バプテスマのヨハネはイエス・キリストを預言した最後の預言者。彼は、罪の赦しに導く悔い改めを人々に宣べ伝えた。人々は自分の罪を告白し、バプテスマを受けた。なぜマルコがこの出来事から福音のはじめを書いたのか？それは、マルコの信仰のはじめが、この罪の悔い改めによる赦しであり、その罪の悔い改めと赦しの中でイエス・キリストに出会ったから。

## III マルコの生涯から神様が私たちに教えたいと願っていること

## 1. 「それが分かったので、ペテロは、マルコと呼ばれているヨハネの母マリアの家に行った。そこには多くの人々が集まって、祈っていた。」(使徒 12：12)

キリスト教の指導者でこの時、最前線に立っていたペテロが捕まり、牢屋に捕らえられるという教会への迫害の中、マルコの母マリアの家でキリスト者が集まって祈っていた。そのところに神様の介入があり、ペテロがそこから救われるという奇跡、神の御業が成されたというのがこの 12 章。その神の御業をマルコは間近で体験した。

## 2. 「サラミスに着くとユダヤ人の諸会堂で神のことばを宣べ伝えた。彼らはヨハネも助手として連れていた。」(使徒 13：5)「パウロの一行は、パポスから船出してパンフィリアのペルゲに渡ったが、ヨハネは一行から離れて、エルサレムに帰ってしまった。」(使徒 13：13)

ヨハネと呼ばれるマルコは、バルナバとパウロの助手として選ばれ、彼らと伝道旅行に行った。マルコは、教会や親に祈られ、送り出されたと思える。しかし、ヨハネ、つまりマルコは、早々に故郷に逃げ帰った。その理由は、はっきりとは分からないが、いくつか考えられる。①郷里伝道からさらに小アジアへの伝道計画の変更で、予測される困難さを前について行くことができなくなったため。②神のみことばを聞きたいと願った総督がパウロとバルナバを招いたが、魔術師のエリマが総督を信仰から遠ざけようと邪魔をする。パウロと魔術師エリマとの霊的戦いをマルコは間近で見て恐れを抱いたため。③この 13 章から、マルコのいとこであったバルナバ中心から、パウロ中心の旅行に移行したことに対する不満を抱いていたため。

## 3. 「それから数日後、パウロはバルナバに言った。「さあ、先に主のことばを宣べ伝えたすべての町で、兄弟たちがどうしているか、また行って見て来ようではありませんか。」バルナバは、マルコと呼ばれるヨハネと一緒に連れて行くつもりであった。しかしパウロは、パンフィリアで一行から離れて働きに同行しなかつた。

った者は、連れて行かないほうがよいと考えた。こうして激しい議論になり、その結果、互いに別行動をとることになった。バルナバはマルコを連れて、船でキプロスに渡って行き、パウロはシラスを選び、兄弟たちから主の恵みにゆだねられて出発した。」(使徒15:36~40)

いどこでもあったバルナバは、挫折したマルコのことを見捨てなかった。祈り、励まし、育てていたことが感じられる。しかし、パウロは一行から離れて働きに同行しなかったマルコを信用せず、一緒に連れて行くことを許さなかった。そしてマルコは自分のことで、バルナバとパウロが議論になり、別れて宣教をすることになり、責任を感じ、とても辛かったはず。その後、マルコの名前は見られなくなる。

4. 「私とともに囚人となっているアリストルコと、バルナバのいどこであるマルコが、あなたがたによろしくと言っています。このマルコについては、もし彼があなたがたのところに行ったら迎え入れるように、という指示をあなたがたはすでに受けています。」(コロ4:10)

しかし、何年か後にパウロは彼の書簡の中にマルコを記し、ここでマルコはパウロと一緒に獄中に居ることが記されている。

5. 「私の同労者たち、マルコ、アリストルコ、デマス、ルカがよろしくと言っています。」(ピレ24)  
ここでは、パウロがマルコのことを私の同労者と呼んでいる。

6. 「ルカだけが私とともにいます。マルコを伴って、一緒に来てください。彼は私の務めのために役に立つからです。」(テモテ第二4:11)

一目散に逃げ出し、信用を失っていたマルコが、パウロに「役に立つ」者であると言われる程に変わったことが記されている。

7. 「あなたがたとともに選ばれたバビロンの教会と、私の子マルコが、あなたがたによろしくと言っています。」(ペテロ第一5:13)

バビロンとは当時のローマ帝国を指し、大迫害の中、マルコはペテロの付き人として働いていたことが分かる。

つまり、これらの箇所から分かるように、主が置かれたところから、逃げ出すことのないマルコに変えられていたということ。それは、彼がマルコの福音書で初めに書いているように、彼自身が福音に出会い、罪を示され悔い改め、イエス・キリストの十字架によって罪赦され、永遠の滅びから救われたことを確信したから。イエス様のために伝道旅行に出かけたはずだったが、逃げてしまった。その他、犯してしまった罪の一つひとつを赦された。逃げ出した時、パウロとバルナバが自分のことで議論をした時、自分はなんて情け無い者なんだと感じ、何度もマルコは諦めかけたのではないか？しかし、その度にパウロやバルナバ、ペテロがマルコに、自分達が犯した失敗や挫折を分かち合い、失敗や挫折をしても「福音の恵みによって再び回復させ、用いてくださる」という福音の希望を伝えていたはず。福音の恵みによってもう一度立ち上がらせてくださると。

このマルコが福音書を書いていた時代は、教会、キリスト者への激しい迫害の時代。また、ローマ皇帝が自らを神だとしている時代。その中で、マルコが福音書の初めに、「神の子、イエス・キリストの福音のはじめ。」と書くことは、命がけのこと。しかし、それ程までにマルコは、この福音によって変えられ、そして、一人でも多くの人達にこの福音の喜びを伝えずにはいられなかった。だからマルコは、創世記の「はじめ」と同じ言葉を使い、神に背き、その罪によって滅びるはずだった私たち人間を、創世記の時の神との良い関係にこの福音によって、回復させてくださるのだと命がけで語っている。

私たちが、どれだけもうダメだと失敗や挫折をしたとしても、神様の前に罪を告白するのであれば、神様は必ず私たちを立ち上がらせてくださる。それは、イエス・キリストが命懸けで与えてくださった福音の恵みによって。神様の福音の喜びの中にもう一度生き続けたいと思っても、この罪の世に浸り抜け出せなくなってしまっていたり、または、自分の力でどうにかしようとして解決しようとしても、立ち上がれないと思う時もあるが、逃げ出さずに神様と自分との一対一の祈りの中で素直に、今までのあやまち、罪を告白して歩みましょう。主が、福音の恵み、十字架の赦しによって、何度でも私たちを立ち上がらせ、用いてくださることを感謝致します。